

第1回ジャパン・ツーリズム・アワード大賞受賞

「瀬戸内国際芸術祭」に込めた思いを語る

全国各地で地域観光振興の取り組みが進められる中、その推進役として旅行業界が果たす役割への期待も増えています。過疎の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が「希望の海」となることを目指す「瀬戸内国際芸術祭」は昨年、第1回ジャパン・ツーリズム・アワードの大賞を受賞し、その地域再生への取り組みが注目を集めました。3月に開幕した「瀬戸内国際芸術祭2016」の実行委員会会長である香川県の浜田恵造知事と総合プロデューサーを務める公益財団法人福武財団の福武総一郎理事長に、現代アートによる地域活性化や世界に向けた地域文化発信の取り組み、旅行業界への期待などについて、語り合っていました。

「島の人々が笑顔を取り戻す地域の再生を」(浜田知事)

「本当の幸せとはなにか。その思いが芸術祭に結びついた」(福武理事長)

地域活性化で注目された「直島メソッド」

「瀬戸内国際芸術祭」開催への経緯や考え方などをお聞かせください。

福武 私が40歳の時に父が急逝し、東京から岡山へ戻って経営を引き継ぎました。父は直島の開発に携わり、子ども達のキャンプ場をつくらうとしていたのですが、志半ばで亡くなったため、その事業も引き継ぎ、趣味の船で瀬戸内海の島々を回るうちに、瀬戸内海が私のテーマとなりました。瀬戸内海というのは、富士山より先に、日本で最初の国立公園となっていますが、その素晴らしさは、江戸から明治にかけて日本へやってきた外国人が絶賛しています。しかし、その一方で、直島や犬島の製錬所跡、豊島の産業廃棄物不法投棄、大島のハンセン病の国立療養所など、瀬戸内海には、近代における負の遺産も、同時に存在しています。

また、娯楽や情報が東京に集中し、私もそういう東京を楽しんでいたわけですが、娯楽も情報も全くない瀬戸内海の島々でも、人々はとても幸せそうに暮らしている現実もあります。それを見た私は、本当の幸せとは何だろうかということを考えるよう

になり、直島に現代美術館とホテルをつくるなど、瀬戸内海の島々でのプロジェクトを始めようになり、瀬戸内国際芸術祭へと結びついていきました。

今もそうですが、経済偏重に対するレジスタンスといった思いが相当に強くあつて、オーバーに言えば、そういう気持ちがないと、瀬戸内海の離島に美術館をつくらうなんて、誰も考えないだろうと思います。そうしたプロジェクトを展開するうちに町も元気になって「直島メソッド」などと言われるようになり、現代アートを通じて過疎地域の人々が元気になる手法として世界から注目されるようになりました。

浜田 私が知事に就任したのは6年前で、それよりも早くから「瀬戸内国際芸術祭」の話は進んでいたわけですが、香川県では、過疎化の進む離島における人口減少などが非常に切実な問題として表面化してきていました。日本社会における人口減少は、ここ1〜2年で全国的な議論になってきていますが、多くの地方で香川県と同様に、中山間部や離島での過疎化の問題も拡大してきています。そうした状況にどう対応するかという時に、県や国に頼るだけでなく、自分たちの地域の資源、地域として

プロフィール

◎浜田恵造 (はまだ・けいぞう)

瀬戸内国際芸術祭 実行委員会会長

香川県知事。香川県観音寺市出身。香川県立観音寺第一高等学校、東京大学法学部卒業。大蔵省(現・財務省)に入省、理財局国債課長、東海財務局長、地方分権改革推進会議事務局次長、東京税関長などを経て、2010年香川県知事に就任、現在2期目

◎福武総一郎 (ふくたけ・そういちろう)

瀬戸内国際芸術祭 総合プロデューサー

株式会社ベネッセホールディングス最高顧問。ベネッセアートサイト直島代表。2004年に地中美術館、08年に犬島アートプロジェクト「製錬所」、10年に豊島美術館を開館、それらを運営する公益財団法人 福武財団理事長を務める

誇れるもの、財産となるものが何かを考えて、活用していくことも求められてきていると思います。

福武さんが直島で20年以上も前から進めてこられた美術館や建築、住民とが一体となった現代アートの展開は、地域にとつての大きな資源となってきました。直島をはじめとする島々の成功を、3年に1回の「瀬戸内国際芸術祭」を通じて、瀬戸内海

全体にも広がっていくことができるのではないのでしょうか。島に移住で戻ってくる人も出てきて小学校が復活するということのような嬉しい事例もありますけれども、島の人々が笑顔を取り戻すような地域の再生や活性化を目指していきたいと考えています。

「芸術祭」を支えるボランティア達の情熱

——新潟県で開催されている「大地の芸術祭」に触発される部分もありましたか。

福武 北川フラムさんが2000年に始めた越後妻有(新潟県十日町市と津南町)の「大地の芸術祭」も見学して、2003年から私も少し関わるようになりましたが、その活動を見ながら、冒頭で申し上げた負の遺産を背負い、若者も離れてお年寄りばかりになって、どんどん衰退しつつあった瀬



香川県の浜田恵造知事

戸内海の島々でも、現代アートを通じた地域の活性化は出来るはずだと考えました。越後は山奥で、瀬戸内海は島という違いはありましたが、「大地の芸術祭」で最も参考になったのは、「こへび隊」と呼ばれるボランティア組織の存在です。ボランティアの人数が地域の方々と一緒に活動するという形は、直島にはありませんでした。越後妻有は範囲が非常に広いということもあり、ボランティアの人たちが大変上手に地域をサポートしていたのです。

浜田 3年に1回のトリエンナーレを通じて、地元資源を活かしながら地域の活性化を進めるという過程の中で、総合ディレクターの北川さんをはじめ、ボランティアの皆さんや島の皆さん自身の取り組みが一体となつて、世界中から多くのファンを集めることが実現されていると考えています。芸術



福武財団の福武総一郎理事長

祭を支えるボランティアサポーターの方々である新潟県の「こへび隊」は、こちらでは「こへび隊」ですけれども、多くの老若男女が「瀬戸内国際芸術祭」に参画することが、従来から都市を中心に開催されている現代アートの芸術祭との大きな違いになっています。船に乗って島々まで行って、アーティストの方や島の人たちと準備をしたり、お客様の相手をしたりしてくれるわけですが、これら全部を行政サイドやコマースシャルベスで行うことはできないだろうと思えます。そういう意味では、「こへび隊」として来てくれている皆さんの情熱に支えられているとも言えるでしょう。

「地域の魅力」を顕在化・深化させて発信

——瀬戸内国際芸術祭2016の魅力を教えてください。

浜田 今回の特徴としては、3つのテーマで重点的なプロジェクトに取り組んでいることがあると思います。1点目は、国際的な展開、国際化ということですが、もともと、国際芸術祭として、色々なアーティストなども含めてインターナショナルに展開してきており、前回はバン格拉デシュの人たちに頑張っていたのですが、今回は、アジア全体を視野に、夏会期になりますけれども、アジア村というものを展開する予定です。高松空港でも、ソウル・上海・台北といったアジアを中心に国際線の拡充が進んでおり、「瀬戸



「自然と人間を考える場所」として2004年に開館した地中美術館。瀬戸内の美しい景観を損なわないよう建物の大半が地下に埋設されています。地中にありながら、自然光が降り注ぎ、1日また四季を通して作品や空間の表情が刻々と変わる美術館は、直島の代名詞となりました(写真:藤塚光政)

内国際芸術祭」でも国際的な交流をもっと深めていきたいと考えています。

2点目は、「食」をテーマに、瀬戸内の食文化や食文化にもっと親んでもらえるようにしたいと思っています。郷土料理を提供したり、食の情報発信したり、アートを楽しみながら本当に良いものを少し高級な形にして「食」も楽しんでいただけるような工夫も行います。

3点目は、地域文化や地域資源をもっと掘り起こしていくということですが、具体的には、全国ではないかと思われる獅子舞について、県内に900とも1000とも言われる数が存在している獅子舞を行う地元の組の皆さんに登場していただいたり、同じく日本と言われている松盆栽を紹介したり、瀬戸内の地域文化というものを積極的に情報発信して、アートイベントにも組み込んでいけないかと考えています。

福武 知事がおっしゃった3点は、今回の大きなテーマとなりますが、今後も、こうした

対談 浜田知事&福武理事長

テーマを深めていきたいと思っています。一言でいうと、地域の持っている魅力を、我々がより顕在化させ深めて発信していくということ

です。例えば、アジアとの交流については、都市部を中心とする経済交流が中心で、アジアで廉価にモノを作るとか、あるいは輸出や輸入の対象国としての議論ばかりだったものを、地方が中心となつて文化交流も進めていくということなんです。アジアには、実に多様な文化が存在しており、瀬戸内海にも多様な文化があつて、島々にも独特の文化があります。そういった多様な文化の交流は、地方が担うべきだろうし、地方じゃなければ出来ないと考えています。そのことを鮮明に打ち出したのは画期的であり、これからもっと深めていかなければなりません。

「食」についても、「海の幸山の幸」と良く言いますが、やはり、地方の魅力は「食」にあると思います。魅力的な「食」は都会で味わうというのが現状ですけども、「食」は地域の魅力になると同時に、6次産業化などを通じて「食」の魅力が産業に発展する可能性も十分にあるはずなんです。「地域文化の発信」も、地域における伝統的な文化や芸能がどんどん埋没してきている中で、「瀬戸内国際芸術祭」の中で取り上げて、先人が培ってきた文化を顕在化させ、地元の魅力なんだということの周知を図る必要があります。地域にもそのことを深く理解してもらい、地元の人たちの自信や誇りに結びつ

かせていくようなことを行っていきたいと考えています。

アートと地域文化を体感するツーリズム

——第1回ジャパンツーリズム・アワードの大賞を受賞したことについては、どのようにお考えになりますか。

福武 瀬戸内海の島々におけるプロジェクトは、観光振興を目的とするものではなく、あくまでも、現代アートを通じて、地域の人々に元気になっていただくことを一番に目指してきています。その結果として、「瀬戸内芸術祭」の会場となつている島々の素晴らしさとか、イベントの非日常性とかに惹かれて、単なる癒しとか休暇を過ごすということだけにとどまらず、日本も世界も閉塞している状況の中で、本当の豊かさとか、本当の幸せとか、そういうものを探し求める空間として、多くの人に来ていただけたらいいのではないかと考えています。

浜田 第1回の大賞をいただいたことは、本当に有り難く、名誉に思います。今回の受賞は、広い意味での観光交流というものが変わってきている中で、実行委員会の取り組みをご評価いただけたのではないかと考えています。観光のあり方自体が単なる物見遊山から、都会では得られないもの、どこかに置き忘れてきてしまったものを求めるように変化してきており、現代アートが展開されている島々を訪れて、そこに残されて

いる日本の昔からの文化とともに体感することが、新しいツーリズムとして評価していただけたというように感じています。総合プロデューサーである福武さんをはじめ、実行委員会としてここまで取り組んできたことが、こえび隊というボランティアの存在などとともに評価していただいたのを素直に嬉しく思います。

——旅行業界は、将来の展開に向けて、どのように考えていくべきでしょうか。

福武 日本をより魅力的にするには、個性

と魅力のある地域の集合体にしてほしいと思います。そういった地域をどうつくるかということでは、まさに、地域が主体になって、地域独自のあり方を探りだせば、個性と魅力を磨くための手段としての資源は色々なものがあるはずなんです。現代アートのなんか全く使わなくても、様々なやり方で地域の持つ資源やリソースを上手く活用すれば、魅力づくりをすることはできると思います。その魅力を感じて、国内外から人々がやって来るといったことなのではないでしょうか。

浜田 日本が人口減少という課題に直面する中で、交流人口の拡大は極めて重要な意味を持ちます。その交流人口の拡大を触発していくような観光交流の発展は、地域経済にとつても非常に大切なものだと考えています。

◎脚注

「瀬戸内国際芸術祭」

直島や豊島、女木島、男木島、大島、犬島など瀬戸内海の島々を舞台に、トリエンナーレ(3年ごと)に開催される祭典形式で2010年からスタート。各島と高松港・宇野港周辺の会場で、様々な現代アート作品を楽しむことができます。ボランティアサポーター「こえび隊」が島の人々とともに、作品制作やPR活動などを支援しています。

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」

過疎高齢化が進む日本有数の豪雪地・越後妻有(新潟県十日町市・津南町)を舞台に、2000年から3年に1度開催されている世界最大級の国際芸術祭。アートディレクターの北川フラム氏が総合ディレクターを務め、学生を中心とする有志のサポートスタッフ「こえび隊」が、地元の人々とともに芸術祭の運営を支えています。

第2回「ジャパン・ツーリズム・アワード」募集中!!

ツーリズムEXPOジャパンは、昨年の第1回に続き、国内・海外の団体・組織・企業の持続可能で優れた取り組みを表彰する第2回「ジャパン・ツーリズム・アワード」を募集しています。

「ジャパン・ツーリズム・アワード」は、今年9月22日から25日まで開催される「ツーリズムEXPOジャパン2016」の一環として、そのシナジー効果によりツーリズム業界の発展・拡大に寄与することを目指しています。

表彰対象は「国内・訪日」「海外」の2つの領域と、UNWTO(国連世界観光機関)部門賞です。昨年の第1回では133件もの応募があり、大賞には「瀬戸内国際芸術祭実行委員会」の「瀬戸内国際芸術祭の開催による地域再生の取り組み」が選ばれました。

第2回の大賞は、9月22日の「ツーリズムEXPOジャパン2016」開会式で表彰する予定です。

応募の詳細については、ツーリズムEXPOジャパン2016公式ホームページ(<http://t-expo.jp/jp/biz>)をご確認ください。締め切りは、5月31日です。

